

今年、太平洋戦争が終わって六十年目にあたるそうです。夏休みは、たくさん戦争特集がテレビで取り上げられていました。戦争という言葉も聞いて、私には、どんな状況だったのか想像もつきません。時々祖母が「戦争はいやだねえ。」と、つぶやく横顔を見守るだ



小学生高学年の部 最優秀賞

敏子と祖母の涙

佐々木 望美 さん (戸倉小学校6年)



「ガラスのうさぎ」というタイトルこそかわいらしいけれど、読めば読む程に胸がキューンとして、こわい気持ちとかわいそうで泣きたくなる思いでいっぱいになります。途中で読むのをやめてしまおうかと思ったりしましたが、なんだか読まなくてはならないような気持ちになりました。戦争はいやだねえと言った祖母の気持ちを知らなかったのかもしません。

戦争のため、家族がばらばらに暮らさなければならなかった時代。帰国していないお父さんと心臓の弱いお母さんの代わりに、出征するお兄さんに会いに行く役目を背負った敏子は、きつと不安だっただろうな。私には絶対に出来ないことだと思いました。そして、息子の出征を見送れなかったお母さんは、どんなに辛かっただろう。もう二度と会えないかもしれない息子に、どんなに会いたかっただろう。それから、敏子をたった一人で兄のもとへ行かせるのは、ど

んなに不安だったろう。思いが次々と巡りました。大阪で敏子はお兄さんと再会出来たとき、敏子はどれほどうれしかったことでしょうか。制服姿のお兄さんに会う場面を想像した私は、ふと自分の兄のことを考えました。兄も戦争中だったら、学徒として働かされたり、教練所に行かされるはずで。そう思うと家族がみんな暮らせる今が、とても幸せであること考えずにはいられません。戦争は、人々から食べ物も、着る物も、家族までも奪い取った。お弁当では、ご飯の代わりにイモを蒸かして持っていったり、お手玉をほどこして、中の豆を食べたり、服もなく買って、下着など一年に二枚も買えばよいほうで、敏子はお兄さんのお下がりランニングを着させられた事もありました。恥ずかしくて、自分で刺しゅうをしていったことを先生が怒った場面はショックでした。お兄さんのランニングが恥ずかしくて、一生懸命に模様をつけたのに、それを怒るなんて。戦争中だって、女の子はかわいいものを身につけたいはずなのに、刺しゅうすらも許されないなんて、

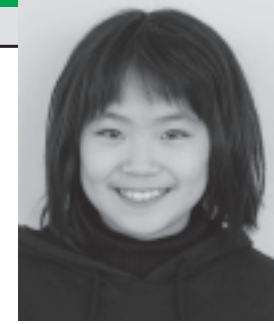
みんなに助けられ、みんなに見守られながら幸せに過ごしていると思います。よわいのを守ってあげるといふことは、とても大切でゆう気のいいことだと思いました。ダンのように、どんな小さな命でも幸せな気持ちになって過ごすことができればいいなと私は思います。これから命の大切さを忘れずに、体の不自由な人やよわい人たちや、いろいろな生き物たちに少しでも自分の力をかしてあげられるような人間になりたいと思っています。



小学生低学年の部 最優秀賞

「目の見えない犬ダン」を読んで

小島 明沙美 さん (志津川小学校3年)



私の家には今、産まれて七目の子犬が四ひきいます。今はまだ一人で歩くことができませんが、やっと目が開いてだっこするのも楽になり、とてもかわいいです。私はこんなかわい子犬を川にすてるなんてかわいそうに信じられませんでした。私が読んだこの本の主人公、石井のぞみさんと久保田のぞみさんが川でひろった子犬は目が見えませんでした。のぞみさんたち二人は、いつまでも同じ所をぐるぐる回っている子犬を見て、(このまますてられていたら子犬は死んでしまう)と思いました。家に持ち帰ってかうことも考えましたが、二人が住んでいる団地では生き物をかうことはきん止されていたので、それはできませんでした。私は前にかつていた犬のゴマが病気で死んでとても悲しかったことを思い出しました。具合の悪いゴマを毎日病院に連れて行き、家族みんなで一匙けん命かん病したのに、死んでしまった時は悲しくて悲しくて何日も何日も泣いてい

ました。私は、ダンにはぜつたいそうなつてほしくありませんでした。のぞみさんたちは団地の大人の一人に一生けん命でダンをかうことがみとめられました。(ダンの命が助かって本当によかった)と思い、ほつとしました。のぞみさんたちのダンを助けたという気持ちは、「盲導犬は目の見えない人を助けるのに、目の見えない犬はどうして見すてられるのですか。」という言葉になり、大人の気持ちをかえました。私にはのぞみさんたちのように、大人につめよるゆう気はありません。ですが、小さなやさしさがたくさん集まれば、大人たちの気持ちもかえることができる大きな力になるんだと思いました。私がかつている、小さくても一生けん命に生きている子犬たちも、目が見えなくてもがんばって生きているこのダンもきつと同じ大切な命なんだと思いました。ダンは今、

目の前で家族が殺されたり、住む所が焼けてしまったり。私には想像できません。もし自分の前でお父さんが殺されてしまつたら、どんなに辛いのか、どんなに悲しいのか、そしてどんなに戦争がおそろしいものか。大切な家族を亡くした敏子の気持ちはどうしようもなく、絶望に近いものではなかったのかと思います。この本を読み終えて、祖母の言った「戦争はいやだねえ。」の言葉を思い出し、祖母の体験した戦争をやはり知りたいたいと思いました。私の祖母が十一歳の頃、戦争が起つたのです。ちょうど今の私と同じくらいの歳です。祖母は涙ぐみながら、当時のことを話してくれました。祖母は、サイレンが鳴つたら、幼い妹をおぶって、山の近くの小さな小屋に逃げたと書いていました。今でも祖母は、サイレンが鳴ると、「サイレンはいやだねえ。」と言うことがあります。今までは、なぜサイレンがいやなのだろうと思っていました。「ガラスのうさぎ」とそっく

りに、機銃掃射が、志津川の空からあられのように降ってきたこともあったそうです。音が聞こえるたびに、みんな布団をがぶつてしのいだそうです。話し終えた祖母は、目頭をおさえていました。祖母は、戦争を取り上げた番組は「戦争のは見たくない。」と言つてぜんぜん見ませんでした。「ガラスのうさぎ」を読み、戦争の悲しさを感じました。そしてなによりも、この本を読んだことが、祖母の戦争体験を聞きつけかけになりました。祖母の話は、命の大切さを改めて気づかせてくれました。そして、私達の未来に、戦争を起こしてはならないという思いを強く持ちました。戦争を知らない私達は、体験聞き、それらの本を読み、戦争の辛さや悲しさを十分に理解することが大切だと思えました。そして、一人一人が命を大切に、平和な世の中になるように、私達は努力していかなければならないと、敏子や祖母が流した涙にふれて、心の中で強く誓いました。

